

離島医療を学びプライマリ・ケアの未来を創造しよう!

金子 惇

横浜市立大学大学院データサイエンス研究科ヘルスデータサイエンス専攻 医学部臨床疫学・臨床薬理学講座

本誌2023年8月号(33巻8号)で「都市のプライマリ・ケア」という特集を企画させていただいた後にまず考えたのは、「いつか離島の特集をやりたい」ということでした。今回岩瀬先生という素晴らしい相棒と一緒に本特集を世に出せることを、本当に嬉しく思っています。

自分が島で医師として勤務したのは3年間だけです。本当にたくさんのことを島の方から教えていただきました。島にいる時から「こんなに楽しく臨床ができることは島を離れたらないだろうな」と思いながら働いていましたし、今でも、いつでも島に戻れるように、なんとか診療能力を維持しようと足掻いています。

本特集の「離島医療イロイロ」の章の論文にあるように、島では楽しいことばかりでなく、大変なこと、つらいことももちろんあります。それでも「当事者」(p.638～の座談会より)として、「そこにいることができる」というのは、医師として、人として、得難い経験だと思います。自分は沖縄の離島しか経験していませんが、本特集を通して、日本にも、世界にも、実にさまざまな島があること、それと同時に、全く別の島でも共有できるものが確かにあることを教えてもらいました。

山下論文(p.605～)にある『「人口が減っているのだからコンパクトシティにするべきだ」という主張が、当事者を不在にして叫ばれているのでは?」「小さいことや少ないことを社会悪のように扱い、人を都市に集中させることで失われてしまうものは何なのか?』という疑問は、自分も最近ずっと考えていることでした。本特集が、読者の方がそのことについて考え、自分にとっての「シマ」について考えるきっかけになればと思います。

岩瀬翔

青ヶ島村国民健康保険青ヶ島診療所



まず、医師6年目で若輩者の私を本誌の企画担当にお誘いくださった金子先生、後輩の私からの執筆依頼を快く引き受けてくださり、多

忙の合間に論文をご執筆いただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

私は医師4年目から、式根島、神津島、青ヶ島の診療所を転々として、キャリアの半分以上を離島で過ごしました。どの島でも診療所長となり、指導医のいない中でここまでやってこられたのは、離島に暮らす方々に、医師としても人間としても育ててもらったからに他なりません。本特集内でも「島医者は島が育てる」という言葉が何度も登場するように、総合診療に必要なスキルの多くは、離島で暮らす人々が生活の知恵として自然と実践しているのだと、専攻医の勉強をしながら島の生活を学ぶことで日々実感しています。

本特集は離島医療を軸に据えつつも、離島経験のない読者にも共通するスキルや考え方を届けることを目的に企画しました。本特集の執筆陣も、現在は国際機関、厚生労働省、大学や急性期病院などさまざまな現場におり、離島医療の経験を活かしながら、素晴らしく活躍しています。

離島に限らず、人間が心豊かに生きるための関係性を「シマ」として地域を捉えることで、都市や大組織であろうとも通じる「シマ思考」が育ち、プライマリ・ケアの未来を創造できると信じています。

本特集を読み終えた時、患者や同僚、家族、地域との関わり方や関係性がより良いものになることを願っています。



Editorial